

沖森卓也『日本語全史』（ちくま新書 2017年）を読んで

—非専門家の観点から—

菅原 睦

1 上代特殊仮名遣と活用形の起源

「母音調和」(pp. 042-047)

陽性（男性）母音 a u o_甲

陰性（女性）母音 o_乙

中性母音 i_甲

イ乙類、エ甲類、エ乙類の生成は（．．．）基本的には母音連続から転じたもので、もとから存在したものではない。そのため、これらは母音調和に関与しないのである。

? 「中性」と「関与しない」とはどう違うのか

被覆形（非独立形）と露出形（独立形）(p. 045)

ama + *i_甲 → ame_乙

ko_乙 + *i_甲 → ki_乙

動詞活用 of 起源 (pp. 070-083)

・連用形の由来

aka + *i_甲 → ake_乙 (明く 下二段連用形)

muka + *i_甲 → muki_甲 (向く 四段連用形)

ara + *i_甲 → ari (有り ラ変連用形)

・終止形は 連用形 + *u に由来 (ラ変「あり」では連用形が兼用)

・連体形は 終止形と同源 語尾のアクセントを高くすることで用法を分化

(ラ変はアクセントの分化とともに、四段の連体形語尾 u の類推

二段・カ変・サ変は 「あり」の連体形から類推された接辞「る」を付けた)

・已然形の由来

muka + *i_甲 → muke_乙 (向く 四段已然形)

ara + *i_甲 → are (あり ラ変已然形)

(二段・カ変・サ変・ナ変は 終止形 + 「あり」の已然形から類推された接辞「れ」)

? 連用形と已然形の違いの理由をどう説明するのか

形容詞活用の由来 (pp. 085-090)

- ・連用形 (原形) は 語幹 + ku (「連用形はもともと副詞であった」)
- ・連体形は 連用形 + *i_甲 → ---ki_甲
(*i は「露出形にする接辞」)
- ・未然形・已然形は 連体形 + *a → ---ke_甲
(*a は「被覆形相当にする」)

? 動詞と形容詞とで形成の過程が異なる理由は何か

2 助動詞・助詞の起源 (pp. 092-107)

「らし」 (根拠のある推量) :

ラ変「あり」の形容詞形「あらし」に由来

「らむ」 (現在推量) :

ラ変「あり」に推量の「む」がついた「あらむ」に由来

「む」 (推量・意志) :

「見る」の古形「む」に由来

「なり」 (伝聞推量 [聴覚による判断]) :

「音 (ね)」、もしくは「鳴る」の語幹「な」 + ラ変「あり」

「めり」 (様態推量 [視覚による判断・推量]) :

「見る」の連用形「み」 + ラ変「あり」

「べし」 (適当・確信を持った推量・可能) :

副詞「うべ」 (宜) を形容詞化した「うべ=し」に由来

「き」 (過去) :

カ変動詞「来 (く)」の連用形と同源

「けり」 (過去の事実を今の時点で発見・把握) :

カ変動詞連用形に由来する「き」 + ラ変「あり」

「ぬ」 (変化した結果、新しい状態が発生) :

ナ変動詞「いぬ」に由来

「つ」 (動作・作用の完了)

下二段動詞「うつ」 (棄) に由来

「と」 (引用) :

「とにもかくにも」などの副詞「と」に由来

「を」 (対象) :

感動詞「を」に由来 間投助詞を経て格助詞化

「へ」(遠くへ移動する場合の到着点) :

名詞「辺」に由来

「から」:

名詞「から(柄)」に由来

「な」(連体助詞) :

母音調和で陰性(女性)母音の「の_乙」に対する陽性(男性)母音による

「が」はこの「な」から転じたものかとも考えられ、後には主格助詞・接続助詞となった

「ばかり」(程度・範囲)

動詞「はかる」(計)の連用形「はかり」に由来

「のみ」(限定)

連体助詞「の」 + 名詞「み」(身)

「こそ」

「此其(こそ)」と強く指示する語と呼応する形で成立

? 助詞・助動詞が「成立」する前は何がその働きをになっていたのか

【脱線】

- ・トルコ語の接尾辞-*ki* (*masa-da-ki kitap* 「机にある本」)の起源

Meine Hypothese lautet also, dass ein früh suffigiertes {KI} auf ein selbstständiges Element **är-ki* (Kopulaverb *är-* 'sein' plus Partizip *-ki*) zurückgeht.

- ・トルコ語の接尾辞-*miş*, ウズベク語の接尾辞-*gan*の起源

It is conceivable that the East Old Turkic postterminal marker *-miş* and its cognates, Turkish *-miş* and Yakut *-Blit*, have evolved from a postverbal construction with an auxiliary verb whose lexical source was *büş-* 'to ripen, to become mature'; cf. Turkish *piş-* 'to ripen, to mature, to be perfected, to be cooked', etc. (...)

The marker *-GAN*, which corresponds to *-miş* in most Turkic languages, may go back to a similar postverbal construction with an auxiliary verb whose lexical source was *qa:n-* 'to be satisfied, satiated, repleted', 'to be well (sufficiently) done'.

3 音便の発生 (pp. 163-164)

音便の発生は、前後の音の環境においてその発音をしやすくするために、母音もしくは子音が脱落・転化したことによると考えられる。

・ある批判

「発音の便宜のために *nakite* の [k] が脱落して、*naite* になったという説明は無理なく成り立ちそうに見えるが、一事が万事では一般化できない。「置きて」はオイテになるが「起きて／掬」はオイテにならないし、トビテはトンデになるが、カビテ（黴）はカンデにならないから、発音の便宜という説明は当たらない。」

(小松英雄『日本語はなぜ変化するか 母語としての日本語の歴史』 p. 263)

? 次の現象はどう説明されるか

書きて > 書いて 嗅ぐ > 嗅いで
置きて > 置いて 仰ぎて > 仰いで
鳴きて > 鳴いて つなぎて > つないで

指して > 指いて ※現代語 指して
燃やして > 燃やいて ※現代語 燃やして

4 連体形と終止形 (p. 145, p. 212)

語尾が低くなるか、高いままであるかという型の違いは、その後にくる語句との関係が表現の上で切れるか、続くかということと深く関わっている。たとえば、連体形は、活用語尾が高いままで、後ろにくる体言を修飾し、意味の上でかかっている。

(. . .)

連体形で文が終わる用法(連体止め)では、文末が低く終わらず、高いままであることから、次に続くというニュアンスを持ち、そのため余情・余韻を残して文が終わるように感じたわけである。

? 終止形と連体形のアクセントの違いは、それぞれの形式に内在的なものか

(連体止めは) 余情・余韻、詠嘆の気持ちを表すものである。このような表現は、聞き手の注意をひくという表現効果によって好まれ、平安時代を通して次第に多用されていった。その結果、連体形が本来持っていた強調という表現効果が次第に薄れていく一方で、文を終止する形式として一般化するに至った。

・ある批判

「一般に、体系に関わる言語変化は基底社会方言から生じるものであつて、植物にたとえれば、枝の先端に咲いた花に相当する仮名文学作品における表現の好みは日本語の活用の根幹を揺るがせ、活用形を一つ失わせたなどということがありうるはずがない。」

(上掲書 pp. 173-174)